カトリック
広島教区報

No. 90
カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
服部大介神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区幟町 4-42
広島司教館内
TEL（082）221-6017

「信仰年」を迎えて

カトリック広島司教区長
前田 万葉 司教

信仰を見つめ直そう旅の秋

信仰年の始まりに当たり、日本カトリック司教協議会は、『「信仰年」メッセージ』と『日本の教会の課題』を発表いたしました。『「信仰年」メッセージ』は、―信仰の恵みを見つめ直す旅に招かれて―との副題が付けられており、「信仰年」を迎えるにあたっての重要な要旨をコンパクトにまとめています。また、全信者に呼びかけるため、ミサの説教でも紹介できるような形式となりました。

そして、『日本の教会の課題』は、メッセージの内容をより深めることが出来るよう、その背景にある趣旨を説明した文書となっており、これも全信者にメッセージの解説ができるような形式となっています。

①『「信仰年」メッセージ』では特に、「感謝の祭儀を通して自分の信仰を深めるよう励みましょう」と、呼びかけています。

②そして『日本の教会の課題』では、三の（二）で、「とくに感謝の祭儀を単なる義務の対象、順守すべき儀式ではなく、いつもわたしたちとともにいてくださる神と交わり、ともに生きる喜びを体験し、分かつ場として大切にしていきましょう。感謝の祭儀は、キリスト者の生活の『源泉であり頂点』だからです。」と、その内容・背景を深め、解説しやすくなります。

③そこから関連して、『信仰の門』九の「『信仰年』は、信仰を典礼の中で、とくに感謝の祭儀の中で深く『記念』するためのよい機会ともなります。感謝の祭儀は『教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉』だからです。わたしたちが告白し、記念し、生き、祈る信仰の内容を再発見し、信じることについて考察することは、すべてのキリスト者が自分のものとしなければならない務めです。」と核心に迫ります。

④そこから具体的に、教区では、小教区では「ミサ（感謝の祭儀）からのカテケジス（信仰教育）、ミサへのカテケジス、ミサからの活動、ミサへの活動、信仰からの奉仕、信仰への奉仕」となり、いろいろな信仰問題、社会問題への解決につながり、平和の使徒になっていけるでしょう。

＊十月七日（日）に平和の使徒推進本部から配布された司教メッセージ「信仰年が開幕します」を合わせてご覧ください。

新任司教研修　教皇様謁見

パパ様の「平和広島」秋の声

司教メッセージ「信仰年を迎えて」　一面
教区の動き・平和俳句「万葉賞」・聖ディエゴ喜斎　二～三面
平和行事・ネットワークミーティング　四～五面
サポートセンター・司教叙階一周年・JICaRM　六～七面
地区・海峡からの風・施設・青少年・ひと粒　八～十面

「信仰年」シンボルマークとその解説

四角形で示される区画の中で、教会を象徴する船が波の上を進む。船のメーンマストの十字架とともに、３つの帆が、キリストを表す３文字（IHS）をかたどる。
帆の背景の太陽は、IHSの３文字とともに聖体を示す。

YEAR OF FAITH 2012 2013

教区の動き
平和の使徒推進本部

●「信仰年」への取り組み

教皇庁教理省から出された覚え書き『「信仰年」のための司牧的指示』における第三として、教区レベルでの指示があります。この信仰年の根拠となっている第二バチカン公会議と「カトリック教会のカテキズム」の重要性を思い起こすこと、受容しているか検証すること、また学ぶことを特に強調されています。

十月十四日（日）の倉敷教会の公式訪問に合わせて行われた開幕ミサが、教区としての開始式であり、閉幕式は来年二〇一三年十一月二十四日（日）に世界平和記念聖堂で行われる予定です。

平和の使徒推進本部の本部会議において、教区として取り組んでいける可能性を考えてみました。

①司祭大会の開催。カテケジス（信仰教育）についての研修。

②若者と人生の意味を探している人々を対象にした対話の集い。

③学術界や文化界など現代社会の思想と信仰の創造的な対話の機会を設ける。

④カトリック学校との連携

⑤教区民全体としてカテキズムの重要性を再認識し、それぞれのグループで理解を深める勉強会を推奨する。

●広島教区創立九十周年へむけて

来年二〇一三年五月四日をもって、広島教区は創立九十周年をむかえます。教区の信仰の歴史を振り返り、信仰年の期間中に迎えるこの節目の年を祝う行事をすすめていこうと考えています。記念ミサを行うことや、自分自身の教会（各小教区）の現状や様子、歴史などをこの機会に学んでもらうこと、また自分以外の教会を訪ねて廻るスタンプラリーなども計画しています。

平和俳句　万葉賞　2012

平和行事２０１２の企画として、広島教区内で平和の俳句を募集いたしました。優秀俳句は以下の通りです。

《大人の部》

九条を守り祈らむ原爆忌（げんばくき）
（幟町教会）梶山總子

蝉時雨（せみしぐれ）語り部の声大となり
（祇園教会）篠田清子

あまがえる代替エナジーどこにある
（廿日市教会）林共栄子

陽炎（かげろう）のゆらめく先のドームかな
（幟町教会）松尾繁

君の折る真夏の鶴の意味を知り
（廿日市教会）髙井吉支子

その中の筆太「平和」流燈会（りうとうえ）
（廿日市教会）平田ユリコ

とんぼ追う子らに重なるはだしのゲン
（廿日市教会）河原典子

七夕や平和のねがい短冊（たんざく）に
（翠町教会）吉川弘之

夕凪（ゆうなぎ）に祈りの風吹く鎮魂歌（レクイエム）
（三篠教会）古屋敷一葉

平和なり殉教の地の柿若葉（かきわかば）
（水島教会）小林敏子

《子どもの部》

平和はねみんなのえがおではじまるよ
（三篠教会）おか田き子

かみさまねいつもそばにねいるんだよ
（広島マリア幼稚園）よしとみう

カエル鳴き田んぼの中に空がある
（水島教会）森本みかり

流れ星平和のねがい届けてよ
（防府教会）石田悠太

さみだれがかなしみながす雨になれ
（防府教会）石田悠太

けんかしていやになるよりなかなおり
（祇園教会）川口菫

《中高生の部》

いつ来るか核無き日々はいつ来るか
（米子教会）新大樹

平和だなあリンゴふたりで分けたとき
（水島教会）森本結月

学び舎の被爆桜に平和請う
（三篠教会）伊藤実音

選者句

戦争は死ですと聞こゆ鐘の夏

選者講評：前田万葉司教

多数の応募に感謝。豊富な優秀作に選句苦慮でした。大人の部一句目…やはり「九条は世界の宝」ですね。二句目…「語り部の皆さん熱中症注意」です。三句目…「神様教えて」。四句目…「子どもの応募句にもあった負の遺産」ですね。五句目…「どんな平和」かな。子どもの部一句目…「えがおはじぶんをかえて、あいてをかえて、うんめいをかえて、平和になる」んだよね。二句目…「きょうこうさまもおなじようなこと」をいいましたね。中高生の一句目…季語なしだけど、「本当に早く来い来い」です。二句目…戦争もなく、「青春を返せ」と言わなくてもよい時代をいつまでも。

＊応募総数、大人の部419句（161名）、子どもの部150句（75名）、中高生の部20句（12名）

聖ディエゴ喜斎の遺骨を迎え（1）

シスター髙木孝子
（ノートルダム清心女子大学学長）

今年は日本二十六聖人の列聖一五〇年目を迎える年である。

二十六聖人の一人、聖ディエゴ喜斎は、豊臣秀吉のキリスト教弾圧で処刑された、岡山市北区芳賀生まれの人である。彼のゆかりの地である岡山教会では、迫害の中で信仰を貫いた聖人たちを記念し、その精神を思い起こそうと、彼が列聖された六月八日、聖ディエゴ喜斎の遺骨を長崎の日本二十六聖人記念館から迎え、祈りの集会を行った。

この恵みの時に、聖ディエゴ喜斎の生誕地・岡山とナミュール・ノートルダム修道女会との関わりについて、述べてみたいと思う。

この関わりは、一九二四年（大正十三年）に、清心高等女学校を譲り受けたことに端を発している。当女学校は、一八八六年（明治一九年）以来、岡山の弓之町で女子教育に献身していたフランス系の女子修道会であるショファイユの幼きイエズス修道会の経営によるものであった。ところが、この修道会が岡山をひきあげることになったのである。

当時岡山は大阪司教区に属していたが、やがて新しく創設される広島代牧区に移管され、教区長にはドイツ人のイエズス会士ヘンリー・デーリング大司教を迎えることになっていた。

大司教はノートルダム会のマサチューセッツ州ウォルサム管区長、シスター・フランセス・セイクレッド・ハートに手紙を書き、その学校の職務を引き継ぐシスターを要請した。その要請は急を要するものであった。というのは、フランス人のシスターたちの出発が迫っていたからである。大司教の書簡は熱のこもるものであった。

大司教はまた、ナミュール（ベルギー）在住の総長シスター・マリア・ジュリアンにも手紙を書いている。というのは、総長はそのような使徒職の委託依頼に対して、最終的な権限を持っていたからである。大司教は総長にこう述べている―「岡山は聖ディエゴ・市川喜斎の生まれた地であり、彼もきっと岡山での新しい宣教に賛同し、祝福していることでしょう。」また大司教は総長にこうも説明している。―「もうすでにウォルサム管区長シスター・フランセスにも手紙を書き、急いで返事をくださるように頼んでおきました。もちろんいい返事を期待しています。」

幸運にも、デーリング大司教からの手紙に、シスター・フランセスは次のように返答している―「大司教様の熱意あるお申し出に対して総長も積極的な取り組みを示しております。しかし、総長は大司教様にはっきりしたお返事をする前に、もっと詳しい情報を求めております。」総長が求めていたのは、次に示すような情報であった。

・日本語で教えなければならないのか。（シスターのなかには日本語を話せる者がいなかった。）
・どのような教科目を担当するのか。
・各教科で何名の生徒を受け持つのか。
・授業内容。日程はどのようになっているのか。
・学校、修道院の設備・維持はどうなっているのか。
・シスターたちの霊的指導はどの程度得られるのか。
・修道院独自のチャペルでミサは保障されるのか。

一か月もしないうちに、大司教は、できる限りの情報を添えて返事を送ったのである。（次号に続く）

（本稿に使用した書簡は、ノートルダム会の母院であるナミュール修道院の古文書館に保管されている。）

＊写真は岡山教会 浜口直樹氏からの提供。

聖ディエゴ喜斎の聖腕

パウロ・フランシスコ・アシジ
長谷川 儀 神父 帰天

広島司教区の長谷川儀神父は、９月１３日、肺腺がんのため広島赤十字原爆病院にて帰天。享年８１歳。

１９３１年広島市内生まれ。１９４５年に広島市内で被爆、岡崎裕次郎神父（イエズス会）にて瀕死の状態で洗礼を授けられる。

１９６５年福岡サンスルピス聖堂にて、マレラ枢機卿より“私は核兵器に殺されるよりも、核兵器に反対して殺される方を選ぶ”心で司祭叙階。叙階後は、幟町、呉、観音町、三篠、尾道、向原、玉野、廿日市教会を歴任。また、広島を訪れる巡礼団や修学旅行生など多くの方々に、被爆証言の語り部として、反核、反戦を訴えた。

平和行事を終えて

平和行事実行委員会　幟町教会
栗栖　徹

今年の平和行事は、さいたま教区谷大二司教様のお話から始まった。昨年、日本の司教団は、「今すぐ原発の廃止を」という原発反対のメッセージを出された。原子力の負の側面を見過ごしてきたことを反省し、核という非常に厄介で危険な怪物の巨大化に歯止めをかける第一歩として画期的なものだ。

昨年三月十一日の東北大震災での福島第一原子力発電所の爆発事故を受けて、今年のテーマは、「平和のきずな　8・6／3・11」になった。さいたま教区には、福島に隣接する茨城県があり、仙台教区とともに地震と津波で大きな被害を受けた。その教区長として脱原発への熱い思いをお話しいただいた。

谷大二司教

原発は、廃棄物として容易に核兵器に転用可能なプルトニウムを生み出すが、その処分方法さえ見通しが立たず、膨大な量が蓄積し、後世につけを残している。福島の事故で放射能という目にみえない脅威に多くの人がさらされ、長年住み慣れた土地を追われて帰宅もできない痛みをきちんと受け留めたい。

続いて、原発事故からの避難者ということで、福島からではないものの、小さいお子さんを抱えての不安から、東京から故郷の三次に避難してこられた徳岡さんに避難者としての立場から被ばくの恐怖についてお話ししていただいた。東京は、福島からは離れているとはいえ、放射性物質が風にのって飛来し、水道水や近隣県でとれた野菜やお茶などから基準を上回る放射能が検出された。今でも地上に落ちた放射性物質が河川などに蓄積されて高濃度の放射能が検出され、魚介類への汚染が懸念されている。チェルノブイリの事故後、ウクライナで甲状腺異常の子どもが増加したことから、小さいお子様を抱えていると、内部被ばくに敏感になるのも不思議ではない。放射性物質は、どんなに微量でも体内に蓄積されると長期にわたり放射能を出し続け、染色体を傷つけるため、五年後、十年後に異常を引き起こす可能性が高まるからだ。福島県で暮らしている親たちは子どもたちが被ばくするリスクを抱えながらの生活を送っており、心配が尽きないのではないかと思う。

徳岡真紀さん

その次のプログラムは、被爆証言と分科会である。私が司会を務める予定だった長谷川神父様（九月十三日帰天）の証言は、体調を崩されて残念ながら中止となった。そして、急遽もう一人の被爆証言者である観音町教会の朴南珠（パクナムジュ）さんの司会を務めることとなった。

朴さんは、十二歳の時、疎開先に弟妹を連れていく途中、自宅に近い観音町を走っている電車の中で被爆された。幸いご家族全員無事ではあったが、瀕死のやけどを負い死んでいった大勢の被爆者のなかで過ごした悲惨な体験を、生々しくお話ししていただいた。

朴南珠さん

戦後、被爆と在日という二重の差別と貧困の中で、悲しみや苦しみも多かったことと思うが、明るく生きることをモットーに生きてこられた姿がとても印象的であった。ご高齢のため足が悪く、大聖堂の内陣の階段の昇り降りでさえ大変そうであったが、その身体をおして思い出すのがつらい体験をお話しいただいたことにはとても感謝している。終わった後には、韓国

平和祈願ミサ

から訪問された若い方たちとしばらく交流された。

分科会では、福島から避難者された方たちのお話があり、好評であったが、残念ながらそちらには参加できなかった。

その他、例年通り日本聖公会との合同プログラムである平和公園の供養塔前での祈り、平和行進、平和祈願ミサでは、前田司教の司式、ヴァチカンから諸宗教対話評議会議長代理前事務局長ピエル・ルイジ・チェラータ大司教、教皇庁駐日大使ジョセフ・チェノットゥ大司教、大阪教会管区の司教、長崎教会管区の司教の共同司式で行われた。翌日は、8・6の追悼ミサとピースウォークなど盛りだくさんの行事であった。

そして、九日の長崎原爆の日には、原爆が落とされた十一時から追悼ミサが行われた。九日は、例年、広島ではこのミサだけであるが、今年は、幟町教会から長崎への巡礼バスを出してもらい、浦上での松明（たいまつ）行列と平和祈願ミサに参加した。このバスには、市内の教会や岡山、呉、福山からも参加があった。神輿（みこし）にのった被爆マリア像を先頭に、平和公園から浦上天主堂まで松明を片手に行進し、被爆死された約六千五百名の浦上信徒の追悼と平和への祈りをミサでささげた。広島と異なり参加者のほとんどが長崎教区民の方で、行列に七百名、ミサには千二百名参列という長崎信徒の皆さんの信仰の篤さに心を打たれる巡礼であった。

左、ジョセフ・チェノットゥ大司教
右、ピエル・ルイジ・チェラータ大司教

第23回ネットワークミーティング in 世界平和記念聖堂

九月十五、十六日に幟町教会（世界平和記念聖堂）に於いてネットワークミーティングが行われました。ネットワークミーティングとは、全国から青年と青年の活動を支援している人たちが集まり、親交を深め情報交換をする集まりです。

今回のテーマは「Peace be with you の you って誰なんじゃろう??」（ここで言う you とは平和の挨拶を交わす相手のことです）。参加者は百五十名、中には十二時間もかけて会場に来てくれた人もいました。

一日目は、最初に平和公園やその周辺を班ごとに回り、夕食を食べてから会場へ戻りました。初めて出会った人たちが話し合いながら回るルートを決めたり、夕飯を食べる場所を決めたりすることで段々と打ち解けることが出来たようです。

次に、各教区どんな青年活動をしているか発表するインフォメーションがありました。様々な発表があり今後の活動のヒントになったことでしょう。

夜には交流会が行われ、班のメンバー以外にも様々な参加者と交流を深め、連絡先を交換する等、この場で交流が終わるのではなく今後に繋げることが出来たと思います。

二日目は、平和とは何か、青年として今どうあるべきか等、各班で分かち合いが行われました。前日に慰霊碑等を巡っていたので平和の事に関する分かち合いをした班が多かったようです。

最後に三末司教様司式による閉会のミサが行われました。平和の挨拶を交わす時には「Peace be with you」と言いながら握手を交わしました。皆別れを惜しむように固い握手を交わしていました。

この様な全国の青年が集まる会を行えたことは、神父様や信徒の皆さんの協力があったからだと思っています。本当にありがとうございました。

最後に、ご家庭に対象となる年代の方がおられる方は是非このネットワークミーティングについて伝えてあげてください。次回は来年二月に大阪教区内で行われます。

ネットワークミーティング実行委員会
実行委員長　三宅恒大（幟町教会）

東日本大震災支援

岡山教会平和共生委員会
鈴木　實

「ふんばろう東日本支援okayama」が岡山教会で始まったのは昨年四月末です。義援金配分は数ヶ月後との事。幹線の大避難所では配賦基準でもめ食料が腐る一方、支援の届かない見なし仮設（半壊の住宅や集会所・知人宅）へ身を寄せている方々は食べ物さえ事欠く現実。更に四月末行政は支援物資募集を中止との知らせ。その時、西條剛央さん（ご実家が仙台で被災、早大先生）が非常時の現地の混乱ぶりをつぶさに見られ、必要とする所へ必要な物を即時に送る事（手から手へ）をインターネットで提案、全国から沢山の善意が参集し私たちも直ぐ参加しました。被災地現場で声を吸い上げる方達（被災者自身も行う）、救援を求める声を回収・データ化するパソコン担当者、ホームページに報告された被災者の支援物資を募集し直接送る人々の三者が自分の出来る範囲で支援を行う緊急時に合ったプロジェクトでした。

相馬野馬追い復活

年末の「あったかサンタになろう」は無数の小さな善意がクリスマス奇跡を生みました。十二月になっても見なし仮設一万三千世帯には暖房なしという被災者の叫びが飛び込み二十日全国へ緊急呼びかけ、約五千万円のカンパで二十六日には希望者全世帯へ発送しました。教会を拠点に始めた活動はカトリック、プロテスタント、一般市民を巻き込み岡山県、中国地方まで拡がりました。ここを借りて協力してくださった教会の皆様には御礼申しあげます。

小さな活動ですが、一年半の継続によりカンパ百三十万円、二百三十一箱の物資送付、昨年夏からは県内への原発避難家族（現在八百余人）へ、今年一月からは「カリタスジャパン大船渡ベース」への支援も行っています。なお、最近の活動報告はブログをご覧ください。

被災地からの手紙

「ふんばろう東日本支援 okayama」
ホームページ　http://fumbaro-okayama.jimdo.com/
ブログ　http://fumbaro-okayama.jimdo.com/ ブログ /

広島司教区災害サポートセンター収支報告
（2011年4月1日～2012年9月30日 現在）

収入	献金	**11,213,631**
支出	支出合計	**2,801,232**
	事務運営費	**18,280**
	振込手数料	18,280
	旅費交通費	**501,052**
	支援費（派遣者の経費を含む）	**2,281,900**
	経費	1,075,000
	送料	37,900
	物資購入	169,000
	「地ノ森いこいの家」支援	1,000,000
繰越		**8,412,399**

司教叙階一周年記念・金銀祝

広島教区に新しい司教をお迎えしてからちょうど一年になる秋分の日（今年は九月二十二日）に、岡山教会で、司教叙階記念および金銀祝の感謝ミサとお祝い会が開かれました。バチカンでの新任司教研修から帰ったばかりの前田司教は、研修で言われたという「赤ちゃん司教」ということを強調して、皆さんからの力を必要としていることを話しておられました。

感謝ミサでの説教は、金祝を迎えられた三喜田神父がユーモアを交えたお話をされ、長年歩まれてきた司祭としての生活を語ってくださいました。他に金祝を迎えられたアルカラ神父と栗谷川シスターも、三末名誉司教をはじめ、参加できなかった方々を代表してお祝いの花束を受け取って、感謝の挨拶を一緒にされていました。

ミサとお祝い会には約四百人の方々が参加され、みんなで慶びを共にしました。準備をしてくださった岡山教会の方々に感謝いたします。

左から、シスター栗谷川、アルカラ神父、前田司教、三喜田神父

愛宮（えのみや）ラサール記念館オープン

世界平和記念聖堂保存活用委員会
青葉　憲明

竣工した記念館（左）と新園舎（2012年8月）

「愛宮（えのみや）ラサール記念館」の竣工式が、九月六日に広島市幟町の広島信望愛学園・聖母幼稚園の新装なったホールで開催された。同幼稚園の新園舎は、既に本年の一月から一部を園舎として仮使用していたが、このたび記念館の中に幼稚園ホール（遊戯室）、職員室、学園本部事務室などが完成し、園舎の建替えが完工した。記念館には、このほか青少年情報室が入居するほか、会議室（三室）を備え、各種のセミナーなどに利用される予定。愛宮ラサール記念館という呼称は、広島カトリック会館が完成した一九九七年以降、旧広島司教館をラサール会館と称していたことを継承している。また、愛宮ラサール神父（エノミヤ　マキビ／ドイツ名・フーゴ・ラサール／一八九八～一九九一）が世界最初に投下された原子爆弾により被爆し、戦争がいかに大きな罪悪であるかを痛感され、再びこのような悲惨なことが起らないように世界に訴えることが原爆犠牲者の霊を慰め、生き残った者の義務であると考え、世界平和記念聖堂を完成に導かれている。このような愛宮ラサール神父の遺徳を偲び、彼の業績を後世に伝えてゆくことも企図して記念館と称することにした。なお、同神父は、幼児の時から信仰教育が大切であると考え、一九四一年（昭和十六年）四月十五日に幟町にある天主公教会の聖堂の一部屋を使って聖母園（現在の聖母幼稚園）を開設している。このことからも同神父の名前を残すことに大きな意義があると考えられている。

愛宮ラサール記念館

愛宮ラサール記念館側面の壁画（聖母子）

J―CaRM広島便り

『違いはあっても心を合わせて』
山口地区・国際サマーキャンプ報告

カルメル宣教修道女会　シスター・ノナ

八月十二、十三日に萩市木与海岸で多文化共生キャンプを行い、約四十人のおとなと子どもが参加しました。ゲーム・水泳・花火・バーベキューでいっぱい楽しんで、朝夕の祈り・テゼの祈り・ごミサでいっぱいお祈りをしました。

そして『心を開いて語り合うこと』にも重点を置きました。心を開いてお互いを尊重し、仲良く受容し合う態度がどんどん高まっていった点で実に素晴らしい感動の二日間でした。

日本語・英語・フィリピン語・インドネシア語・スペイン語を駆使して温かく導いてくださった神父様方、送迎や料理の奉仕を快く引き受けてくださった教会有志の皆様、本当にありがとうございました。

参加した宇部・高千帆・益田・山口・萩・徳山・下松の教会では、キャンプで培った信仰と絆が活かされてさらに活発化することでしょう。残念ながら参加できなかった下関・防府・浜田・津和野の皆さん、待降節・四旬節・国際交流デーなど次の集まりの行事ではぜひお会いしましょうね。そして裾野を広げて子どもたちの将来が明るくなることにつなげましょう！

山口地区でここ数年、皆できょうどうして力を注いで推し進めてきた宣教司牧活動が確実に成果を挙げてきた――まさに蒔いた種が育ち実ってきたのを実感する喜びのお恵みをいただいた国際サマーキャンプでございました。感謝のうちに報告申しあげます。

地区便り

広島地区

＊広島修道女連盟 研修会報告

九月二十二日、十時から十五時まで、広島修道女連盟は、林尚志神父様を招いて研修会を開催した。五十八名の参加者で、広島カトリック会館多目的ホールはにぎわった。テーマは、「3・11」と向き合う私達の修道生活はどのように変わりつつあるか？～切り裂かれる命の中で繋がる生き方の徹底・奉献生活者～。

「踊る司祭」は、多目的ホール内を走り回り一人芝居。現代世界に示されるしるしに対して敏感な感性を持つように、九十歳代から三十歳代の参加修道女達をチャレンジ。各自どういう社会的しるしを生きているか。脱原発の道こそ出エジプト。自由に神を礼拝出来るように罪からの解放への招き。異質なものと出会うことですべてを失い、絆が生まれ、新しいいのちの繋がりを生きたい。

山口・島根地区

＊二〇一二年度養成関係

「山口島根地区少年の集いリーダー研修会」〈下関労働教育センター〉八月二十五日（土）～二十六日（日）にかけて、JPACT（イエズス会教会使徒職協働推進チーム）から派遣された吉村信夫氏（六甲中学高等学校教諭）を講師に、地区内の教会学校・中高生会リーダーや保護者、子どもの信仰教育に関心のある人たち約二十名が参加して研修が行われた。

「聖書力講座」〈山口天使幼稚園〉講師＊雨宮慧（さとし）神父…九月九日（日）。テーマ：わたしたちの罪をおゆるしください。祇園からの参加者も含め、約九十名参加。講演会CD有。

雨宮 慧 神父

「祈りの体験二期」〈地区事務局〉講師＊ラフォント神父…⑨九月八日（土）。信徒協の研修会が重なったため、研修生は少なかったが、密度の濃い研修になった。

「典礼研修会」九月十七日（月）の具神父講師の研修会（山口）は、台風十六号の影響で中止に。

島根ブロック対象の研修会は、地区養成担当の清水神父を講師に、萩教会集会祭儀司式者の協力も得て、九月十五日（土）に益田教会で行われた。研修内容は、「聖体授与の臨時の奉仕者準備講座」と「司祭不在時の集会祭儀実践」。また、今後、奉仕者候補同士が月一回の割合で継続研修を行うことが確認された。

「山口島根地区養成委員会」（地区事務局）十月五日（金）。今年度上半期の各研修報告と来年度計画。

＊その他

信徒協研修会「高齢者ケア」

九月八日（土）、長崎純心聖母会のシスター福田を講師に細江教会において開催。約百二十名参加。

海峡からの風 26

下関労働教育センターだより

いきなりの轟音は嫌いだ。それもしつこい。岩国や沖縄の人々と違い抵抗力が無い。広島教区の端っこの海峡の街下関の空を、傍若無人に米軍新型輸送機MV22オスプレイが飛行する。

「憲法九条は教区の宝」と宣言する教区の上を。日米合同で安全宣言したからと、広島教区の岩国基地から、日本返還四十年を迎える沖縄の抗議・反対を尻目に強引に事を運ぼうというのだ。その手続き的訓練飛行として、下関の上を飛ばせて、沖縄に押し付ける。半世紀の又もの沖縄差別だ。周辺過疎地に安全の無い原発を押しつけるのと同じ論理だ。安全宣言とは、その先の不安全・危険に足を入れる不遜な通過儀式なのか。魂を売って何が欲しいのか。

直ちに市役所前市民抗議座り込みに行き、行政の責任者に市街地上空飛行の抗議をするよう主権者市民として行動する。黙っていてはならない、行動しないでいてはならない。社会愛として行われる「信徒の政治活動」を動かす力を他の市民と協力して発揮実践すべき時だ。（ベネディクト十六世回勅「神は愛」二十九参照）。たとえ焼け石に水と言われようとも。無益・無力と冷笑されようとも。国家権力・世界覇権野望権力に対しても。「王たちの前に福音を証す為に」教会は選ばれている（使徒言行録六‐十五参照）。日本司教団＝教会の脱原発宣言はその意味で、日本の国策に対峙した使命の遂行で有る。

オスプレイの頭上からの轟音の浴びせに、第二ヴァチカン公会議五十周年、現代世界憲章の聖戦論の廃棄、抑止論の崩壊を示す聖霊の道案内を信じる「信仰年」を歩み出すことを海峡の風に託したい。

（下関労働教育センター　林 尚志 神父）

岡山・鳥取地区

＊岡山鳥取地区 信徒養成講座

岡山鳥取地区信徒養成講座は、七月十四日、高松教区の諏訪司教様を迎えて「私たちにとって召命とは何か」、九月八日、山口島根地区長の李相源（イサンウオン）神父様の「神様の呼びかけに応えて」、十月十三日、前田司教様の「広島教区長としてこの一年を振り返って、広島教区のみんなに望むこと」というテーマですべて終了いたしました。

十月十四日には、倉敷教会で、堅信式、「信仰年」開幕ミサが行われました。各小教区でも同時に主日のミサの中で「信仰年」開幕を共に祈ることができました。引き続き、午後、司教様を迎えて、第二回岡山鳥取地区宣教司牧評議会が行われました。みんなで司教様の話しを拝聴し、「平和の使徒になぁ～れ！」の浸透と、サブテーマの「信仰からの奉仕、信仰への奉仕」について全体会をもちました。全体会では、実際に自分達の教会のかかえていることを真剣にみんなで話し合うことができました。

李 相源 神父

伯雲ブロック

＊第四回伯雲ブロック 勉強会

「信仰年」の開始を一ヶ月後に控えた九月十六日（日）に、上智大学神学部教授 具正謨（クーチョンモ）神父をお迎えし、伯雲三教会の信徒が合同で、主日のミサを献げた後、「信仰年について」の勉強会をしました。

パワーポイントを使って、シノドスの「提題解説」の概要や信仰と祈りと生活の関係、信仰生活と宣教使命の面で、シノドスがめざす新しい福音宣教と深く関わっていることなど、わかりやすく講話いただきました。

また、「イエス・キリストの命に出会う」ミサの大切さ、個々人や共同体での「祈りの大切さ」や「信仰は祈りから生まれる」こと。毎日「連願の祈り」「イエス様のみ心にささげる祈り」を自分の言葉で神に祈る等、ご自分の体験を通して話され、最近、常に闇の中にいるような私にとっては、とても心に浸みわたるような講話でした。

この一年間、自分の祈りを深め、共同体の祈りを活気あるものにし、信仰の伝達が出来ればいいなと思います。

（伯雲ブロック協議会　佐野卓司）

具 正謨 神父

広島教区の施設 ⑮

神様にも人様にも喜ばれるように
社会福祉法人純心聖母会 小野田老人ホーム

社会福祉法人純心聖母会　小野田老人ホームは一九七〇年に設立されました。一九六三年、北若山カトリック教会に赴任されたイエズス会士マヌエル・ウラルデ神父様の熱い人間愛に始まりました。その当時、若山炭鉱の閉山によって斜陽化し、若者たちは職を求めて都会へ流出し、老人保護世帯の多くなる一方、当市には老人福祉施設が一つもなく、その設立が切望される状況でした。神父様は老人福祉施設の創設を小野田市に要請してその承認をうけ、教育事業と福祉事業に献身することを目的として活動している私達「長崎純心聖母会」に施設の設立とその運営を委ねました。それから今日までの四十二年間、老人短期入所事業、個室化、外部サービス特定施設への転換を図りつつ、山口県および中国地方における唯一のカトリック老人福祉施設として、慈しみ深い神様の恵みと導きの中で、教会と地域社会のニーズに応えつつ歩みを続けてまいりました。

小野田老人ホームは、神の愛といつくしみの中で一人ひとりの命を大切に受け止め、寄り添い豊かな人生を共有する家族として、毎日ミサに与り、み言葉とご聖体に力をいただき、互いに祈り、助け合いながら人生の完成期を過ごしています。また、多くの典礼行事を通して一人ひとりが神様の恵みにふれることができるように励んでいるところです。神様にも人様にも喜ばれるように。

青少年の活動

練成会「信仰からの奉仕 信仰への奉仕」

八月九日～十一日、岡山教会にて広島教区練成会が開催されました。今回の参加者は四十名ほどでした。

プログラムは、司祭やシスターの召命のお話、聖ディエゴ喜斎記念公園への徒歩巡礼と野外ミサ、レクリエーション、プール、司教様・神父様への質問コーナーなど盛り沢山でした。

以下、参加者の感想文。

今年の練成会は私にとって三回目の練成会となりました。そして今回一番心に残っているのは、聖ディエゴ喜斎記念公園への巡礼です。とても長い道のりでしたが、二十六聖人はもっと長い道のりだったと考えると、がんばって歩くことができました。また、いろんな人と話をしながら歩けて、とても楽しかったし、いい経験になったと思います。

教会に帰ってからも二十六聖人についての勉強をしました。二十六人の中のトマス小崎という少年は三原で母に向けて手紙を書いたことを知りました。それにならい、私たちも自分たちのお母さんへ手紙を書きました。

練成会ではいろんな教会の神父様やリーダー、神学生さんと交流することができます。今回の練成会でも話をしたことのない神父様や神学生さんたちとたくさん話ができました。外国の神学生さんや助祭の方との話がおもしろかったです。日本人とは違った目線で話ができるので、とても楽しいです。プールやバーベキュー、花火で他の教会の子どもたちと仲良くできました。私は人の名前を覚えるのが苦手なので、あまり名前は覚えられなかったけど、いっしょに遊ぶことができてうれしかったです。

練成会でたくさんの人に出会えたことを神様に感謝したいです。

（福山教会・中三）

ひと紋〈74〉

「下から目線で 歴史を見つめてみれば」

イエズス会・下関ブロック　中井 淳 神父

司祭叙階後、下関に派遣されて二年。下関という地は、否が応でも日韓の歴史認識の問題に向き合わされる場所です。今日本の抱えている様々な問題の根本に触れるものがここにあると思っています。でも、同時に、人々の無関心さにも気づかされます。下関在住のうちどれだけの人が下関の担った負の歴史について知っているのでしょうか。私たちは自分の目線でしか物事を見ない傾向があるようです。

先日、病人訪問の道すがら、老人の方と車に同乗していました。教会の前の歩道の大掛かりな舗装工事を見ながら、「別に今までの歩道でそんなに困らなかったし、他にお金をかけるべきものがあるのではないか」と言うと、その方は言われました。「そうですか。私にとっては、ありがたいですよ。」はっとさせられました。そうか、自分は強者の目線でしか物事が見えていなかったのだな、と。

日本の今まで行ってきた歴史をどの目線から見るのかが、誰の目線から見るのかが問われているように思います。『坂の上の雲』の主役は軍隊であり、それによって踏みつけられた民衆の現実は描かれていません。強者の目線ばかりで歴史が覆われようとしています。果たして、私たちは自らが踏みつけてきた人たちの声を真摯に聞いてきたのでしょうか。その視点から私たちの歴史を問い直さなければならないのではないでしょうか。自分の殻に閉じこもってアイデンティティーを見出そうとしても、それは虚構であり、エゴイズムという名の愛国心しか生まれません。私たちは痛んでいる隣人たちのうちに真摯に寄り添うことで真のアイデンティティーを見出せるのですから。そのようにして、主イエスは私たちのうちに来てくださり、十字架を担ってくださったのですから。

十字架称賛の祝日にそのようなことを考えました。

風紋

前田司教様が叙階されて一周年を迎えられました。

司教様は、小教区公式訪問、司教会議委員会、ヴァチカンでの研修など、毎日忙しくされておられます。

どうか健康に留意され、これからも良い働きをされるよう神様に願います。（み）